

自然博物館
ニュース

A·MUSEUM

vol.32
[2002.6.25]



ミュージアムパーク

茨城県自然博物館



中川館長の案内で企画展「コリアの自然史」をご覧になる両殿下

秋篠宮同妃両殿下ご来館



第3展示室「自然のしくみ」にて

茨城県地方事情ご視察のためご来県された秋篠宮同妃両殿下は、4月11日午前、多数の来館者がお出迎えするなか、当館にご来館されました。

館内では、川俣勝慶茨城県教育長が当館の概要を説明した後、中川館長の案内により、シンボル展示「松花江マンモス」、「ヌオエロサウルス」、第3展示室「自然のしくみ」、ディスカバリー・プレイス「茨城の特徴的な自然」をご覧になりました。また、講座室に特別展示されていたサーベルタイガーの骨格標本をご覧になった秋篠宮殿下は「サーベルタイガーは、マンモスを食べていたのでもっと体高があったと思いましたが、意外に低いですね」と話されました。つづいて、第24回企画展「コリアの自然史—大陸と日本を結ぶ生きものたち—」では、中川館長による説明をお聞きになりながら、アムールトラの標本や、チョウセンズガエル、コウライケツギョなどの生体を熱心にご覧になられました。

見て聞いて 觸れて わくわく ミュージアムパーク

第25回企画展

時を超える生き物たち 一生きている化石のひみつ一

Species Beyond Time-Miracles of Living Fossils

今日の自然の大切さを知るために、その時代的な背景を学ぶことが必要だと思います。今回、そのための格好の材料として私たちが選んだのが「生きている化石」と呼ばれる生き物たちです。何億年という長い時間を変わらぬ姿で生き残ったものたち、かつて地球上に広く分布していたながら、現在は地球の片隅に細々と生き残るものたちのことです。生きている化石たちは、様々なことを私たちに教えてくれるでしょう。

主な展示物

シーラカンス

化石でしか知られていなかったこの魚が1938年に南アフリカ共和国沖で発見されました。それ以来、「生きている化石」として様々な調査、研究、報告が行われてきましたが、その生態についてはまだ謎が多い魚です。今回の企画展では実物のはく製標本、深海で泳ぐ映像、各時代の化石標本など、豊富な資料で展示を構成します。また、シーラカンスのウロコにタッチするコーナーも設けます。



シーラカンスのはく製

オウムガイ

はるか昔のアンモナイトの姿を想像させてくれ、楽しいことです。同じような姿形、しきみを持っていたアンモナイトとオウムガイですが、どうして一方は恐竜たちと共に滅び、一方は生き残ったのでしょうか。水槽を泳ぐオウムガイやアンモナイトの化石を見ながら、あなたも推理をめぐらせてみましょう。



オウムガイの化石



オウムガイ（提供：鳥羽水族館）

会期	平成14年7月13日(土)～9月29日(日)
開館時間	午前9時30分～午後5時(入館は午後4時30分まで)
休館日	月曜日(ただし、9月16日、23日は開館し、翌日休館します)
入館料	大人 720円(580円) 高・大学生 440円(300円) 小・中学生 140円(70円)
※()内	は20名以上の団体料金です。
※	未就学児、65歳以上の方、障害者手帳をお持ちの方は入館無料です。
※	春・夏・冬休み期間中を除く毎週土曜日は、高校生以下の児童・生徒は入館無料です。
※	この料金には、本館内常設展・野外施設入場料が含まれています。



コモロ諸島のシーラカンス（提供：鳥羽水族館）

メタセコイア

現在、公園や学校などで目にすることが多い樹木ですが、日本に入ってきたのは、いや戻ってきたのは50ほど前です。この植物はかつて日本中に生えていましたが、およそ80万年前に日本では絶滅してしまいました。メタセコイアの名付け親である三木茂博士の功績や中国での発見の物語を紹介すると共に見上げるような大木を展示室に再現します。



茨城県内で発見されたメタセコイア化石



最初に発見された生きているメタセコイア（中国湖北省）
(撮影：百原 新氏)

イチョウ

あなたはイチョウの花を見たことがありますか？日本では最も知られている樹木のひとつであるイチョウですが、知らないこと、意外なことも数多くあります。日本から運ばれたイチョウはヨーロッパでは園芸、薬用として大人気です。今回の展示を見れば、あなたもきっとイチョウを見直すことでしょう。

(教育課：滝本秀夫)



中生代ジュラ紀のイチョウ化石



平瀬作五郎が精子を発見したイチョウ
(東京・小石川植物園)

記念行事

- ・自然講座「生きている化石に学ぶ」
7月13日(土) スペシャルゲスト：濱田隆士氏(福井県立恐竜博物館館長)
 - ・自然講座「巨大いん石が地球をおそう」
7月28日(日) 講師：平野弘道氏(日本古生物学会会長)
 - ・自然講座「身近なイチョウの意外な話・謎」
9月8日(日) 講師：堀輝三氏(元筑波大学教授)
 - ・自然講座「メタセコイアの自生地を訪ねて～中国揚子江紀行～」
9月8日(日) 講師：百原新氏(千葉大学助教授)
 - ・ミュージアムコンサート「ヴァイオリンは時を超えて」
9月15日(日) 午後5時30分～7時
- ※事前にお申し込み下さい。申込み方法等詳細については本号インフォメーションの欄をご覧下さい。本号発行時に定員をこえ受付を終了している場合にはご了承下さい。

研究ノート●小貝川でキタミソウ発見

昨年（2001年）小貝川でキタミソウの生育が確認されました。最初の確認は昨年の6月で、国土交通省下館工事事務所による環境調査を担当した黒石和宏氏（環境調査技術研究所）によって発見されました。キタミソウは絶滅危惧IA類（環境省のレッドデータブックで絶滅の危険性が最も高いランク）に指定されている植物で、小貝川は日本で4番目の产地、茨城県では初記録ということになります。すでに約20種の絶滅危惧植物の生育が確認されている小貝川の重要性はますます高まるばかりです。

キタミソウはゴマノハグサ科の湿生植物で、葉の長さ2~5cm、花の直径2.5mmとかなり小形の植物です。小さくて目立ちませんが、先がさじ形に膨れた細長い葉が特徴的で、一度見ればほかの植物と見まちがえることはありません。

「キタミソウ」の名は、この植物が最初に北海道北見で発見されたことによるといわれ、シベリア・カムチャツカ・サハリンなど北半球の寒帯に広く分布します。この地方では、雪がおそらくまで残る雪田に生育するといわれます。

第一発見地の北見地方では、現在のところ生育確認の報告はなく、日本の生育地は、北見とは遠く離れた埼玉県と熊本県の2県といわれていました。

熊本県の生育地は熊本市郊外の江津湖で、ここでのキタミソウの生活は、湖の水位が下がる秋に発芽して冬に開花結実し、夏の岸辺が冠水する時期には姿を消すのだそうです。北方の生育地とは生育期間が全く逆です。

埼玉県の生育地は岩槻・越谷・草加市

にまたがる元荒川・古利根川・葛西用水などの水系です。キタミソウの生育地である河川敷は、4月~8月の期間水没しています。周辺の水田に水を引くため堰（せき）を閉じるので、堰の上流側で水位が上昇するからです。水を落とす9月~3月に生育地が地上に現れ、キタミソウが姿を見せるのは熊本と同じです。

今回、キタミソウが確認された小貝川の生育地の大部分は、埼玉県と生育環境が全く同じで、福岡大堰によって水位が調節され、夏の期間は冠水している所です。昨年6月の最初の発見は、福岡大堰の下流の冠水しない湿地で、わずかな個体が確認されただけでした。その数ヶ月後、水を落として干上がった福岡大堰の上流側に大群落が出現したのです。から

だの小さなキタミソウはこの堰の開閉という人為的な水位調節がなくなれば、すぐに生育環境を失うことになります。

生育地の大部分は、現在水の底ですが、この秋もまたキタミソウの元気な姿を見ることができると確信しています。博物館でも調査研究を続けながら今後の経過を見守り、群落の保全に努めたいと思っています。

（企画課：小幡和男）



キタミソウ *Limosella aquatica* (ゴマノハグサ科)



10月の福岡大堰上流部 一面オオオナモミの群落が成立している。干上がるのが遅れた凹地の水際にキタミソウが発芽している。右奥に堰が見える。



12月の福岡大堰上流部 真冬でも青々としているのがキタミソウ群落。オオオナモミ群落(右側)は枯れている。



3月の福岡大堰上流部 かなり乾燥しているがキタミソウ群落は元気である。右奥に堰が見える。



4月の福岡大堰上流部 福岡大堰は再び閉ざされキタミソウ群落は水没した。右奥に堰が見える。

小さな発見—ミュージアムコンパニオン●新発見！海のトンネル

皆さんは、博物館で動く恐竜のジオラマに行く途中、青いトンネルのコーナーを通ったことを覚えていますか。そこは、地球が誕生した後にできた初めての海をイメージしたものです。その中で注目していただきたいところがあります。壁に描かれている絵をよく見ると、ゆらゆらと動いている生き物が見つかること思います。その中のひとつを紹介します。トンネルを入ってすぐ左側の壁をよくご覧下さい。赤く光った三葉虫が一瞬現れます。三葉虫はカンブリア紀からペルム紀

の間に生息した生物で古生代の示準化石となっています。また、体が縦に左右と中央の3つに分かれていることからこの名前がつきました。その他にもトンネルの3カ所でクラゲや魚が泳いでいる姿を見る能够で、ぜひ探してみて下さい。博物館の展示の中には、皆さんが気づいていない工夫もたくさんあります。毎回その中から新しい発見をもらえたたらと思います。

（ミュージアムコンパニオン：岡田美智子）



第2展示室 原始の海

展示紹介●世界一大きなカニータカアシガニ

第3展示室「自然のしくみ」の海の生態系のコーナーにタカアシガニの雄と雌のはく製が展示されています。この標本は2000年の夏に開催された第19回企画展「蟹の泡吹き・エビのつぶやきーその多様性を探るー」の入口付近に展示されていた標本で、企画展終了後、新たに第3展示室に追加展示されたものです。

タカアシガニ *Macrocheira kaempferi* は世界最大のカニで、英名を Japanese giant crabといいます。成長した雄がハサミ脚を左右に広げると3mを超えることもあり、ギネスブックでは5.79mの個体も記録されています。第3展示室に展示されているタカアシガニはハサミ脚を左右に広げると、雄で3.18m、雌で1.24mの長さがあります。



第3展示室の海の生態系

タカアシガニは1836年に新種として記載されて以来、日本特産とされてきましたが、その後、台湾の沖合水深200mの海底でも発見され、現在では日本特産種とはいえなくなっています。このカニは、主に、東北沖から九州西岸までの太平洋側の水深150~300mに分布しており、特に、駿河湾の戸田村は底曳き網によるタカアシガニ漁が盛んな場所として有名です。展示されている標本も1996年2月25日に戸田港で水揚げされた個体です。

タカアシガニと言えば、今でも忘れない出来事があります。2000年の夏に開催された企画展で、幸運にも、脱皮の瞬間に目にする機会に恵まれたのです。その個体は同年に駿河湾で採集されたタカアシガニの小型の雄でした。7月下旬頃から急に餌を食べなくなり、7月28日の午後4時頃、腰を下ろしたままの状態で、甲らの後縁部が開き始めました。脱皮開始です。関係職員は慌てて、水槽の周囲を黒いシートで覆い、その様子を固唾をのんで見守りました。途中、



タカアシガニの脱皮



タカアシガニの脱皮殻

動きが止まり、脱皮に失敗したのではないかとあきらめかけたこともありましたか、午後7時40分頃、再び動き始め、脚が徐々に抜けていきました。そして、無事に脱皮が終了したのは午後8時20分。過去には10時間以上もかかったとの記録もありますが、小型の個体だったためか、脱皮にかかる時間は約4時間20分でした。脱皮前は甲長17cm、甲幅12cmだった個体は、脱皮後、その甲幅は約1.2倍に成長していました。また、脱皮殻を見ると、甲らだけでなく、触角、えらや毛の1本1本までそっくりそのまま抜け替わっていました。その見事な妙技に私たちはただただ感服するのみでした。脱皮の過程は一部、ビデオに録画され、脱皮殻とともに博物館に保存されています。タカアシガニの脱皮については国内の水族館等でいくつかの記録がありますが、当館でのケースも貴重な記録の1つとなることでしょう。

(資料課：池澤広美)



第3展示室に展示されているタカアシガニの雄(下)と雌(上)のはく製標本

野外だより●自然博物館を支えている地層

とんぼの池の南側の歩道脇に、黄褐色の地層が高さ2mほどにわたって露出している崖があるのはご存じでしょうか。

自然博物館がある猿島台地は、このようなローム層と呼ばれる地層に広く覆われています。これは赤城山、日光男体山などの火山から噴出した火山灰や軽石などが主に陸地で積もってできた地層です。

一方、付近を流れる飯沼川下流や鬼怒川河床では、砂や泥の地層が露出し、その所々で貝化石が大量に見つかります。これは約12~13万年前にこの付近を覆

っていた海で堆積してきた地層です。そして、地下ボーリング調査によって、自然博物館の地下約14mの所に貝化石を含む砂層があることが確認されています。

ところで、とんぼの池の脇のローム層をよく見ると、水の流れによってできたクロスラミナ(斜交層理)の模様がみられます。つまり、この地層は陸上ではなく、浅い水底で堆積したものでした。ぜひ、この崖を見て、当時、水がどちらに向かつて流れていたのかを現在の地形と見比べて考えてみて下さい。(資料課：小池 渉)



とんぼの池の脇のローム層

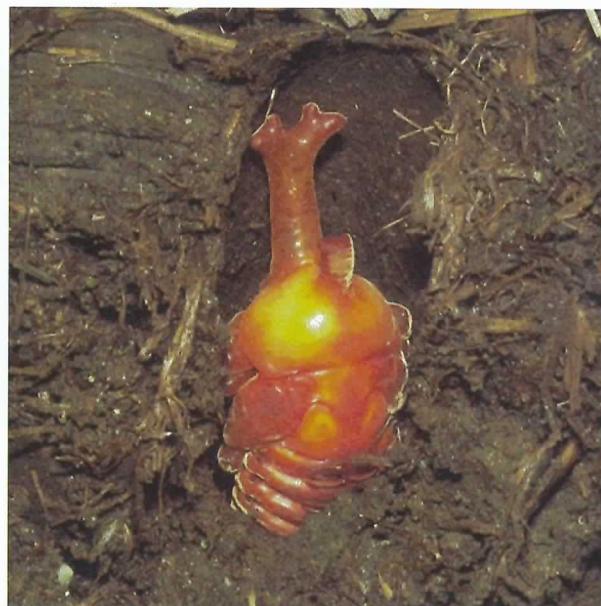
歳時記●カブトムシも早く羽化

今年は、入学式の頃に葉桜しか見ることができませんでしたから、季節が2週間ほど早く進んでいるようです。このような暖かい年は、昆虫たちも早く羽化してくるのでしょうか？

答えは単純ではないようです。昆虫と植物の関係は密接で、植物の芽吹きや開花に合わせて、羽化する昆虫がたくさん見られます。たとえば、初夏に見られるミドリシジミの幼虫は、ハンノキの若葉をつづつて巣を造ったりします。このように関係を深めた両者ですが、春の訪れは、日長を感じたり、積算温度が関係したり、または冬と春との温度差が関係したり、いろいろな要素を反映します。単純に花が早く咲いたから昆虫も早く出てくるとは結論できないのです。

さて、標題のカブトムシですが、この種は簡単で冬が暖かいと早く羽化してくるようです。例年ですと6月の後半はさなぎの時期ですが、今年は早く成虫を見ることができるのではないかでしょうか！ 実は我が家(つくば市)では、4月21日にカブトムシの成虫を拾いました。どこから来たのか未だに？ですが…。

(資料課：久松正樹)



カブトムシ♂のさなぎ '85.6.27 つくば市にて今井初太郎氏撮影

収蔵品紹介●高教研植物標本 —博物館建設の原動力となった標本—

当館が開館したのは平成6年ですが、そこからさかのぼること25年前、茨城県教育委員会からの委託業務として昭和44年(1969年)から数年間にわたって茨城県南部・東部を中心にして大がかりな生物調査が実施されました。これを行ったのは、茨城県高等学校教育研究会生物部であり、通称高教研生物部と呼ばれる高校の先生方を中心とする組織でした。

その調査で収集された植物のさく葉標本は、990種3,300点にのぼり、その中には、開発される前の鹿島地区や筑波研究学園都市で採集されたものも多数みられます。これらの標本は、1960年代の茨城県の平地に生育していた植物をほぼ網羅しており、茨城県の植物相がどのように変化してきたかを知る上でたいへん貴重な資料となっています。また、開発の著しかった鹿島臨海工業地域や学園都市では、現在生育を確認できなくなってしまった植物も少なくないので、当時の自然環境を示す証

拠標本としても重要です。

この標本は、前述のとおり学術的に大きな価値をもつものですが、実は、当館にとってはそれだけではない別の価値をもっています。それは、この標本が、「いずれ博物館ができるときにはこれを収めよう」という考えのもとに作成されていたことです。自然博物館建設に向けて、民間レベルの運動が活発化していくのが昭和48年(1973年)頃からですから、博物館建設に向けての記念すべき第一歩がこの時の調査であったといえそうです。したがって、この標本は、当館に収蔵するために収集された最初の標本ということになります。

当館では、いろいろな意味で価値のあるこの標本を大切に保管し、後世に伝えていきたいと考えています。

(資料課：廣瀬孝久)



[左]
デンジソウ (デンジソウ科)
Marsilea quadrifolia

絶滅危惧II類（環境省）、絶滅危惧種（茨城県）
水生のシダ植物。かつては、涸沼や霞ヶ浦、北浦等やその周辺の水田で普通にみることができたが、現在では極めてまれである。小葉が四つ葉のクローバーのように、田の字形に並ぶことからこの名が付いた。

[右]
ナガバノイシモチソウ (モウセンゴケ科)
Drosera indica

絶滅危惧I B類（環境省）、絶滅危惧種（茨城県）
湿地に生える食虫植物。つくば市（旧谷田部町）や神栖町の生育地は、開発等によって大幅に減少した。現在では、限られた場所にごくまれに生育している。

館職員レポート◎つくばエクスプレス「つくば駅」からの掘り出し物 宮崎淳司（資料課・地学研究室）

私は地学研究室で主に貝化石を担当しています。今回は少し風変わりな貝化石の産出についてご紹介します。

平成17年に開通予定のつくばエクスプレス（常磐新線）の工事が、秋葉原～つくば市間で行われています。終点のつくば駅は、学園中央通りの地下に建設されています。その工事現場から貝化石を採集することができました。

昨秋、工事現場で働いている方からの連絡により、貝化石が産出していることを知りました。そして、10月4日に日本鉄道建設公団関東支社つくば鉄道建設所副所長清水一郎氏の案内で現地見学をしました。

現場は、高層ビルが建ち並ぶ学園都市の中心地で、地上部は鉄板によってふたがされていました。そして、地下で掘り出された土砂を地上の重機が運んでいました。



つくばセンター裏の工事現場

階段を降りていくと、地下に駅をつくるための幅21m、長さ352m、深さ20mもの空間が広がっており、地上とのギャップに驚きました。そして、地下に降り立つと、至る所で貝化石が産出してお



地下駅建設現場の様子

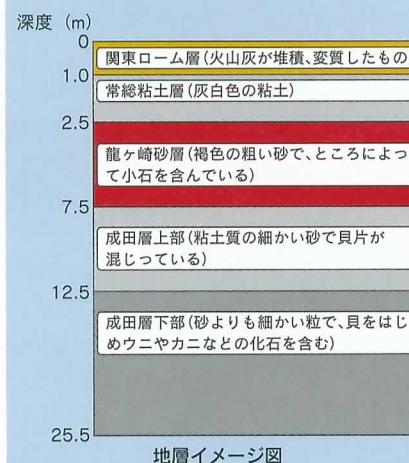
り、まさに時代を遡る階段のようでした。

側面は、内部が崩れないように鉄骨の梁で壁が支えられ、地底部は砂地でした。地上から射し込む光を頼りに産出状況等を確認しました。

鉄道建設公団よりいただいたボーリング資料と採集した貝化石から以下のことことが考えられます。

1 地質の概略

当地は標高26m程度の平坦な大地面で、地層の成り立ちは以下のとおりです。



地底部の砂地に含まれている貝化石

今回、貝化石が産出したのは、今からおよそ12～13万年前（新生代第四紀更新世後期）に關東平野の一帯が古東京湾とよばれる海だったころに堆積した成田層からです。

2 産出した貝化石について

地下18～20mの土砂の中から、巻き貝33種、ツノ貝1種、二枚貝40種、計74種の貝化石を確認しました。この時代の貝化石は、そのほとんどが現在の海でも生息している種類なので、当時の自然環境を知る手がかりとなります。

産出した貝化石の種類から、当地は暖流の影響を受けた海であったと考えられます。

鉄道建設公団のご厚意で、貝化石を含む土砂を大量にいただきました。今後は来館者の皆様に、当館野外で採集していただく予定です。

コラム by director NAKAGAWA ◎ニワトリ

4月11日午前10時半、秋篠宮・同妃両殿下が当館にお成りになりました。2日間にわたって茨城県をご観察される最初の施設となつたのです。宮様は、私が日本動物園水族館協会の会長だった頃、同協会の総裁にお迎えした経緯もあって、再びお目にかかる機会に恵まれ大きな感激でした。

当時から宮様はナマズの研究家として著名でしたが、ナマズに限らず魚類は勿論のこと動物一般についてもご造詣が深

く、最近はニワトリの研究に意欲を燃やしておられます。

それも、ニワトリがどのような野生種からどのような経過で家畜になつたのかにご興味を持たれ、遺伝学的研究もさることながら民俗学的な面からも追求されています。民俗学的な部分では妃殿下もご協力されている由を伺いました。その関係でしょうか、茨城県の軍鶏の展示を興味深そうにご覧になっておられたのが印象的でした。



イラスト：瀬楽かおるさん

トピックス◎3~5月

「映像で見るコリアの自然」 3月16日(土)

第24回企画展「コリアの自然史一大陸と日本を結ぶ生きものたち」特別イベントとして開催された「映像で見るコリアの自然」では、コメントーターに韓国野生動物連合常任議長韓尚勲氏を迎え、韓国鳥類保護協会広報理事姜甲錫氏による「韓国の鳥類保護活動」、韓国智異山生態保存会会长禹斗晟氏による「韓国智異山国立公園内の野生動物保護活動」、東京朝鮮学園朝鮮大学校教育学部長鄭鐘烈氏による「朝鮮半島と日本を行き来する渡り鳥の保護」についての講演が行われました。朝鮮半島の自然についての貴重な映像も交え行われたこのイベントでは、参加者との活発な意見交換などもあり、大変有意義なものとなりました。



朝鮮半島の自然についての貴重なお話を伺うことができました

展示解説員によるスポットガイド開始 4月

学校が週5日制になるのにもともない、当館では、土曜日の午前11時と午後2時からそれぞれ10分程度の時間で、展示解説員によるスポットガイドを開始しました。このスポットガイドは、館内の展示物をより詳しくわかりやすく解説し、子供たちにもっと興味をもつてもらいたいと始めたものです。館内の展示室内などで、展示解説員それが「たねのしげ」や「昆虫の擬態」、「ムササビとモモンガ」などのテーマを持ち、来館者に

模型やはく製などもつかいながらわかりやすく解説していきます。スポットガイドをお聞きになりたい方は、どうぞお気軽にご参加下さい。



第3展示室で行われたスポットガイド

野外探検クイズ大会 4月29日(月)



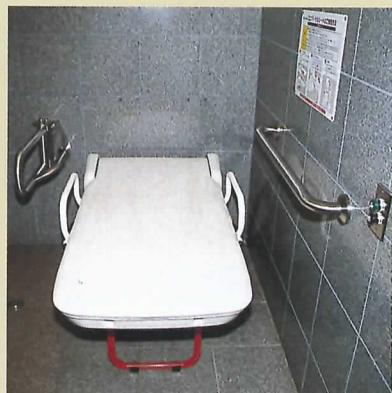
チェックポイントではスタンプを押してもらいました

サイエンスデー「生物・科学の日」記念イベントの一環として、「スタンプ集めて賞品ゲット! 野外探検クイズ大会」を行いました。これは、クイズ用紙にある5カ所のチェックポイントを博物館野外で探し、クイズを解くことによって、博物館野外に楽しみながら親しんでもらおうというものです。参加された方々は、澄み切った青空の下、ご家族やグループで博物館野外を探検しながら、心地よい汗を流していました。

多目的シートが設置される

このほど、恐竜ホール脇にある障害者用トイレに多目的シートを設置しました。これは、高齢者・障害者から乳幼児まで、どなたでも、着替えやオムツ替え等のために使用していただけるものとなっています。

今後も、より一層のバリアフリー化を進め、皆さんにとって安心して観覧できる博物館を目指していきます。ご意見・ご要望等ございましたら、館内投書箱「あなたの声」におよせいただきますようお願いいたします。



恐竜ホール脇に設置された多目的シート

水系だより

最近、第3展示室の水槽に変化があるのをお気付きでしょうか。実は、湖沼水槽に水草（コウホネのなかまとオオカナダモ）の展示を試みています。水草の展示は以前にも行いましたが、長期間の展示は今回が初めてです。自然の中では水草は丈夫に育ちますが、その水草を水槽などに入れると環境の変化等により枯れてしまうことがあります。また、魚類等と一緒に飼うと土壤を荒らされ水草が浮

いてしまうことがあるので気を配らなければなりません。さらに水草に必要な栄養を与えすぎると魚類に弊害がでることもあり、水草が衰弱してきた時は、その都度水槽に潜り竹の筒ごと予備水槽に移し、栄養を補充して回復を待ちます。このように、両者のバランスをとるのに苦労はありますが、水草を展示すると人も魚類もリラックスできるような気がします。

(水系担当: 大岩義夫)



コウホネ(写真左下)とオオカナダモ(写真右上)

インフォメーション (7~9月の行事)

自然講座 (定員: 300名 ▲印のみ40名)

7月13日 (土) 13:00~14:30

『生きていたる化石に学ぶ』

(対象: 小学生以上)

7月28日 (日) 13:00~15:00

『巨大いん石が地球をおそう

—恐竜・アンモナイトの絶滅—

(対象: 小学生以上)

9月8日 (日) 10:30~12:00

▲『身近なイチョウの意外な話・謎』

(対象: 中学生以上)

9月8日 (日) 13:00~14:30

▲『メタセコイアの自生地を訪ねて

—中国揚子江紀行—

(対象: 中学生以上)

自然観察会 (■夏休みイベント)

8月25日 (日) (定員: 40名)

■『アンモナイトが産出する地層を観察しよう (ひたちなか市)』

9月28日 (土) ~29日 (日) (定員: 30名)

『秋植物とツキヨタケのタベ(筑波山)』

(対象: 小学4年生以上 小学生は保護者同伴)

*現地集合

自然教室 (定員: 40名) (■夏休みイベント)

7月27日 (土) 17:00~20:00

■『ホタルが生きる自然環境を見よう (夜間)』

(対象: 小学生以上 保護者同伴)

8月10日(土)~11日(日)午後~翌朝

■『オールナイト昆虫観察』

(対象: 小学生以上 保護者同伴)

大人&子どもフィールドガイド (■夏休みイベント)

(定員: 大人30名 子ども30名)

9月1日 (日)

■『那珂川の水の生きものを観察しよう (御前山村)』

子どもコース (対象: 小学生のみ)

魚をつかまえて観察しよう

大人コース (対象: 中学生以上)

水生昆虫を観察しよう

*現地集合

ミュージアムコンサート (定員200名)

9月15日 (日) 17:30~19:00

『ヴァイオリンは時を超えて』

(対象: 小学生以上)

[観察会等への申込方法]

2週間前までに電話または博物館ホームページでお申し込み下さい。なお、希望者多数の場合は、抽選を行います (自然講座は先着順)。

また、[■夏休みイベント]については往復ハガキまたは博物館ホームページで3週間前(必着)までお申し込み下さい。往復ハガキでお申し込みの場合は、参加者全員の氏名、年齢、住所、電話番号をご記入下さい。

本号発行時には受付を終了しているものもあります。予めご了承ください。

ミュージアムパーク茨城県自然博物館

TEL 0297-38-2000 · 0297-38-0927 (イベント申込直通)

<http://www.nat.pref.ibaraki.jp/>

サンデーサイエンス 【楽しい体験教室】

月ごとにいろいろなテーマで、毎週日曜日にディスカバリー・プレイス内のスタディールームで実施しています。

観察や実験、工作などの体験をとおして、楽しみながら自然への関心を深める機会です。

テーマ

7月『星座早見盤をつくろう』

8月『けものの足跡レプリカをつくろう』

9月『天気予報機をつくろう』

時間 午前の部 10:30~12:00

午後の部 14:00~15:30

わくわくディスカバー

親子向けの参加体験型イベントです。

7月27日 (土)『砂絵をつくろう』

8月24日 (土)『しゃぼん玉であそぼう』

9月28日 (土)『草木染めに挑戦』

時間 午前の部 10:30~12:00

午後の部 14:00~15:30

[サンデーサイエンス・わくわくディスカバー受付]

開始時間の1時間前から、スタディールーム前で受け付けます。希望者多数の場合は抽選を行います。

自然についてわからないこと、ふしぎだな、と思っていることなど、なんでも気軽に博物館にご相談ください。(来館・郵便・電話・eメールで受付)

その他のイベント

海の日特別イベント

7月20日 (土) (当日受付)

理科自由研究のヒントを見つけよう

7月21日(日)10:30~12:00

対象: 小学校高学年・中学生
及びその保護者
定員: 300名 (先着順)

夏休み自然なんでも相談

7月21日(日)・8月18日(日)

13:30~15:00

博物館1階ディスカバリー

プレイス

相談方法: 直接ご来館下さい。

小・中・高校生無料入館

休館日

7月

日 月 火 水 木 金 土

1	2	3	4	5	6	
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

8月

日 月 火 水 木 金 土

1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

9月

日 月 火 水 木 金 土

1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30					

ご利用案内

[入館料]

区分	本館・野外施設		野外施設のみ
	企画展開催時	通常時	
大人	720円(580円)	520円(420円)	200円(100円)
高校・大学生	440円(300円)	320円(200円)	100円(50円)
小・中学生	140円(70円)	100円(50円)	50円(30円)

(注): () 内は団体料金 (20人以上)

未就学児・65歳以上の方・障害者手帳をお持ちの方は入館無料です。

つぎの日の入館料は無料です。

●4月29日 (みどりの日) ●6月5日 (環境の日)

●11月13日 (茨城県民の日) ●春分の日

●高校生以下の児童・生徒は、毎週土曜日は入館無料です。
(但し、春・夏・冬休み期間中を除く)

[休館日]

●毎週月曜日 (但し、9月16日(月)・23(月)は開館し、翌日休館となります。)

●年末年始 12月28日~1月1日

まつそうです。その大きさは・・・

企画展示室での楽しみに!!

(T.K)

[編集後記]

この夏の企画展「時を超える生き物たち」展の会場に展示されるメタセコイアは、茨城大学の敷地にあったものです。

根を掘り起こし、木を倒すまでに丸4日間、その上大学から博物館まで運ぶ途中、あまりの大きさにメタセコイアを積んでいたトラックが高速道路をおろされてし

自然博物館ニュース A·MUSEUM (ア・ミュージアム)

企画・編集: ミュージアムパーク茨城県自然博物館企画課 / 発行2002年6月25日

〒306-0622 茨城県岩井市大崎700番地 TEL0297-38-2000

ホームページ <http://www.nat.pref.ibaraki.jp/>

E-mail webmaster@nat.pref.ibaraki.jp